

論文「知的障害をもつ子どもの親の心理変容」

日本心理学会第 68 回大会発表論文集, p.333, 2004

特定非営利活動法人「海から海へ」こころとふくしの研究所
阿部愛子

1. 序論

障害をもつ子どもの親の心理については、現在までに、さまざまな方向から多数の研究がされている。Solnit & Stark (1961)は障害児の誕生は母親に喪失感をもたらすと指摘した。Olshansky (1962)は、親の慢性的な悲哀と呼ばれる心理状態と援助について具体的に述べた。Droter (1975)は、障害児の親の障害受容について論じた。障害受容はリハビリテーションの観点からも論じられている(上田, 1983)。ノーベル賞作家としての大江健三郎(1964)は障害をもつ子どもと自分を文学のテーマとしてきた。障害をもつ子どもの親はケアを通じ、自己の発達を遂げている人が少なくないと考えられている (Erikson, E.H, 1971),(Mayeroff, M, 1987)。

また、人の発達研究は広く人間一生の問題としてとらえる視点が発達研究の中で定着している(柏木, 1995)。岡本(1999)は子育て終了後の親の心理状態を空の巣症候群と呼び、不安定な中年期症状と結び付けて論じている。同じように子どもが養護学校を卒業する頃になると障害を持つ子どもの親たちは、地域生活への移行、就労と社会参加など、子どもの自立に伴い現実の問題が浮上し、先行き不安な心理状態のまま長年、悩み続けている例が多いと指摘されている(田中, 1998)。

わが国では知的障害を持つ子どもの親についての研究は「子どもの障害をどのようにして受容したか」(田中・丹羽, 1990)、「親のケアラーとしての役割と発達」(鎌, 1963)や「親へのカウンセリングの事例」(岡野, 1994)などに留まり、成人期の知的障害を持つ子どもの親については研究がほとんどない。また、障害を持つ人の社会制度は2003年4月から変革が始まっている。親の問題もその社会との関係性から見ていかなければ解決の糸口が見えてこないのではないだろうか。しかしこの分野の研究もほとんどない。

2. 目的と方法

筆者は成人期の知的障害を持つ子どもの親の心理変容を明らかにすることを本研究の目的とする。

親の心理研究は親への調査協力を依頼することである。調査協力には困難が予想されるが、臨床心理学的手法を用い、カウンセリングを行う気持ちで丁寧に相手のいうことに耳を傾けることにより親の思いを探る研究ができるのではないだろうかと考える。複数の対象者を募り、阿部(2004)の質問項目(表 1)に基づき半構造化面接を行い、成人期の障害を持つ子どもの親の心理変容について質的な分析(Strauss & Corbin, 1990)を行う。

3. 結果

成人期の障害を持つ子どもの親 16 人に 12 の質問項目による半構造化面接を行い、質問項目ごとに質的な分析をした。51 歳から 75 歳の父親が 4 人(27%)、44 歳から 77 歳の母親が 11 人(73%)であった。障害を持つ子どもの性別は男性 9 名(60%)女性 6 名(40%)で、18 歳から 50 歳であった。居住地域は首都圏 6 人、関西地方 3 人、九州地方 3 人、北陸

地方 3 人であった。知的障害以外に、癩癩、難聴、上肢や下肢に麻痺など他の疾病・障害を合併しているものがいた。出産後 3 年以内で子どもの障害が判明している。親の心理変容について、時間軸は「過去」、「現在」、「これから」、「親亡き後」に分類できた。また、カテゴリー「障害をもつ子どもの誕生の意味」、「障害の受容」、「子どもの発達と親の発達」、「コミュニティと援助」、「親亡き後」を抽出した。

4. 考察

上記カテゴリー上に親のトピックスを位置付け、成人期の知的障害を持つ子どもの親の心理変容について、考察を行った結果、以下の点が示唆された。

(1)障害を持つ子どもの親は、日常の暮らしを続けながら、この日常の次元だけではない多次元の世界を生きている。親は子どもの誕生から激しい心理的作業を行い、いくつかの次元を自己のうちに統合できたとき、新たな段階の変容がはじまった。(2)多くの親にとって、安定した心理状態になるには時間が必要であり、障害受容のプロセスは多様であった。(3)親の誰もが子育てに熱心であり子どもにとってよいと思われることを一所懸命行う姿をみることができた。親は障害の子どもの子育てをしていくうちに自己を肯定的に考え、子どもの成長とともに自己の位置づけができるようになっており、親自身が発達を遂げていくプロセスが確認できた。(4)2003年4月支費費という制度が始まった。援助は変わりつつある。学校を出た後は、コミュニティでの暮らしが当たり前になってきている。施設を選択する人は格段に減少し、本人主体の選択の時代へと動き出している。その選択が親の心理に及ぼす影響や親の役割とは何であるのかなどを再考する時期がきていると考えられた。(5)親亡き後は兄弟姉妹に依存したいと答えから、現状では親の不安は解決されていないことが明らかになった。老年期を迎えた親に新たな問題が起こっていると考えられる。(6)障害を持つ子どもの親(と子ども)に対して、全生涯的な発達を援助する視点から、心理学、医学、教育学、福祉学、社会学や行政を含めた包括的な援助が行われることが望まれている。

質問項目

- 質問 1: お子さんとあなたの年齢はいくつですか
- 質問 2: お子さんの障害名は何ですか
- 質問 3: いつ障害がわかりましたか
- 質問 4: 障害がわかったとき、どんな気持ちでしたか
- 質問 5: 心理的な援助を求めましたか
- 質問 6: いつ、お子さんの障害を受容しましたか
- 質問 7: お子さんの昼の場と夜の生活はどのようなのですか
- 質問 8: コミュニティとの関係はどのようなのですか
- 質問 9: これからの生活を、どのように考えていますか
- 質問 10: 自立をどのように考えていますか
- 質問 11: 障害のお子さんを育てたことで変化がありますか
- 質問 12: ご自分の死後、お子さんはどうなると思いますか